

800周年を越えて： いのちを与える聖霊



ORDO FRATRUM
MINORUM

1226 — 2026
Franciscus
Ottocento anni dalla morte di san Francesco

2026年聖霊降臨祭に向けた総長書簡

© P. Ruberval Monteiro da Silva OSB



小さき兄弟の皆さん、
クララ会および無原罪の御宿り会の姉妹の皆さん、
フランシスカン家族女子修道会の皆さん、
在世フランシスカンの皆さんへ、

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、

主が皆さんに平和を与えてくださいますように。

私たちは今、フランシスコと「姉妹である死」との出会いの800周年を祝っています。3年間にわたって準備を重ねながら、会則、グレッチョのクリスマス、聖痕、被造物の賛歌、そして死にいたるまで、フランシスコの地上の歩みをたどってきました。

この過程が一貫したものであると理解する言葉をお伝えするのは、重要だと思われます。なぜなら、この800周年を、何の痕跡も残さずに終わる単なる祝祭の一つにしてはならないからです。私は、フランシスコの人物像を「記念碑化」し、生涯の場面をスナップ写真のように固定することで、内面的動きを見失う危険性を感じています。しかし、まさにそこにこそ、主が聖霊によって、フランシスコを通して教会と世界に与えてくださった賜物、すなわちそのカリスマを見いだすことができるのです。聖霊降臨祭の九日間の祈りの初めに、この手紙を皆さんにお送りするのは、まさにそのためです。私たちは、新たな福音的活力を願いながら、いのちを与える聖霊に対して、私たちをその光へと、その炎へと開いてくれるよう呼びかけます。フランシスカン家族に属する私たち一人ひとり、そして私たちとともに生きる世界が、どれほどそれらを必要としていることでしょうか。

✦ いのちを与える主の霊

私たちのまなざしの方向性を定めるためには、判断基準が必要です。よく考えてみると、フランシスコの導きとなったのは、単純に、いのちを与える主の霊であったように思われます。フランシスコは、その「聖なる働き」¹に開かれて、聖霊が自分のなかに、周囲に存在していることを認識、その靈感に従うことを恐れませんでした。

聖霊はフランシスコに、主の御顔を追い求める生活、旅人であり、貧しく、告知するために自由であり、兄弟的で、全ての人、とりわけ貧しい人々と連帯する生活形式として、福音を示しました。フランシスコが、その歩みのさまざまな段階において観想し、受け入れたのは、働きかける聖霊の存在です。そして今、私たちも、それぞれの置かれた生活の状況のなかで、改めてその存在を認識できることを願っています。

¹ 聖フランシスコ『勅書によって裁可された会則』10・8



✦ フォンテ・コロombo: 文書の上の霊の自由

フランシスコは、フォンテコロomboにおいて、知恵ある職人として、会則の文面のなかに聖霊を解き放ちました。それは、従順のうちに、自分のものを一切もたずに、貞潔のうちに、小さき者、兄弟として、イエスの福音に従って生きることです。² この文章に到達するまでの道のりは長いもので、フランシスコは深く掘り下げました。フランシスコと兄弟たちは、いかにしてより明確なかたちで原初的輝きを生き生きと守っていくかを問いながら、成長し変化し続ける共同体の危機を乗り越えました。

✦ グレッチョ: 神の愛が私たちの肉にあらわれる

チェラノのトマスによれば、フランシスコがグレッチョにおいて、受肉の謙遜と創造の単純さのなかで肉となった福音を観想したとき、その生涯の第一部が終わりました。³ フランシスコは、肉、物質、そして人間の具体的歴史こそが、神が住まうことを選ばれた場所であると認識しました。神は、聖体において、私たちを貧しく素朴な生活へと誘いながら、「ご覧なさい。…毎日ご自分を空しくされます。毎日、卑しい姿と私たちのもとに來られます」⁴ フランシスコは、グレッチョにおいて、どんな現実も神の神秘の一端をあらわし得ることを学びました。

✦ ラ・ヴェルナ: 傷を乗り越えたいのち

フランシスコは、ラ・ヴェルナ山で三たび福音書を開き、受けた試練のなかで、いのちを与える聖霊の息吹を経験しました。フランシスコは、深い内なる闇に包まれ、自分が「虫けら、役に立たないしもべ」⁵であることを認めます。そしてまさにこの場所で、貧しさのうちにあらわれた栄光の十字架との出会いによって、いのちへと引き戻されます。セラフィムは、真のいのちとは、最後まで自己をささげることを通して得られるいのちであるとフランシスコに示しました。聖痕によって疑問が消えたわけではありませんが、フランシスコをキリストとより深く結びつけ、ささげられた苦しみからも新しいいのちが生まれることが明かされました。

✦ サン・ダミアノ: 夜から生まれた賛美

フランシスコは、サン・ダミアノにおいて、苦しみ、病、失明という夜のただ中で福音を生きました。試練の闇は、いのちの霊がフランシスコを賛美へと開いたとき、『被造物の賛歌』の直観を生み出す懐となりました。フランシスコは、神の名を告げるのを助けてくれるように、もう一つの福音、すなわちすべての被造物という書に呼

² 聖フランシスコ『勅書によって裁可された会則』1・1

³ チェラノのトマス『聖フランシスコの生涯（第一伝記）』84～87

⁴ 聖フランシスコ『訓戒の言葉』1・16～17

⁵ 『聖フランシスコの小さき花』「聖痕についての第三の考察」



びかけます。⁶『被造物の賛歌』は、この輝かしい夜に、苦しみのなかから生まれました。⁷ それから、サン・ダミアノの姉妹たちへの勧告⁸へと続きます。その後、『被造物の賛歌』には、赦しの節が書き加えられました。フランシスコは作詞を続け、歌い続け、今度はまさに「姉妹である私たちの肉体の死によって」主を賛美し、死ぬ前にいま一度この賛歌を聴きたいと願いました。

✦ ポルチウンクラ: 過越としての死

神の子に従う歩みの頂点であるフランシスコの死は、ポルチウンクラにおいて、とりわけ兄弟的關係という賜物を通して、主の過越を祝うものとなりました。フランシスコは、母のように、兄弟たちに囲まれていました。そして、福音書のイエスが弟子たちの足を洗う箇所を読んでもくれるよう頼みました。⁹「姉妹」と呼ばれる死との出会いは、「全く清浄な水によって潤された、非常に魅惑に溢れた所」¹⁰への扉を開きました。フランシスコはこうして、この世の生から永遠のいのちへと旅立っていきました。

✦ 私たちに残されたもの

私たちには、フランシスコによって始まり、時代とともに多くの兄弟姉妹たちを通して成長してきたこのいのちの何が残っているのでしょうか。フランシスコを魅了し、変化させたあの輝きは、いまなお、あらゆる世代にとっていのちの種であり続けています。そして私たち、全世界の兄弟たち、姉妹たち、そして在世フランシスカン員たちは、いまどこにいるのでしょうか。

誠実に、この問いに向き合いましょう。なぜなら、私たちが「カリスマ」と呼ぶ聖霊の賜物が、まさにそこで育まれるかもしれないからです。しかし、この賜物がいまだ語られていないものを私たちの時代に明らかにしてくれるかもしれないと問うこともせず、巡礼所で、繰り返される伝統のなかで、私たちに受け継がれてきた場所において、ただそれを大切に守り続けていくだけでよいのでしょうか。フランシスコは、チェラノのトマスから、「別の代の人」¹¹と呼ばれています。フランシスコにおいて具体的かたちを帯びたいのちは、その可能性がすべて示し尽くされたわけではなく、神の未来へと向かって私たちを導いてくれるのです。

⁶ 兄弟レオと仲間たちによって書かれた『コンピラティオ・アシシエンシス』(ペルーシア伝説) 83参照

⁷ 『コンピラティオ・アシシエンシス』 83参照

⁸ 聖フランシスコ『聞いてください、貧しき娘たちよ』。サン・ダミアノ修道院の貧しい娘たちのために作られた旋律付きの言葉

⁹ チェラノのトマス『魂の憧れの記録(第二伝記)』 214

¹⁰ チェラノのトマス『魂の憧れの記録(第二伝記)』 219

¹¹ チェラノのトマス『聖フランシスコの生涯(第一伝記)』 36、『三人の伴侶による伝記』 54参照



✦ あらゆる「記念碑化」を乗り越えて

800周年が終わった後も歩みを続けていくために、私たちがすべきなのは、フランシスコによって始まったいのちを妨げず、それがいまままでにないかたちを帯びるのに任せることです。そのいのちは、聖霊の導きによって生まれました。そして聖霊自身が、今日でも新たな形態を帯びることができるように、このいのちに活力を与え続けてくれます。

ですから、私たちは、「カリスマの賜物は、現代において、どのような小さき兄弟たち、観想の姉妹たち、在世フランシスカン員たちを思い描き、生み出そうとしているのでしょうか」という問いを避けては通れません。私たちは、いまなお私たちの扉を叩く人たちを、どのようなフランシスカン員に養成したいと願っているのでしょうか。私たちが自分の召命の賜物に応えていこうと模索するさまざまな状況のなかで、これらを自らに問うていきましょう。実際、私たちが活動するさまざまな文化や歴史という文脈のなかに位置づけられているこのいのちは、他者の生、例えば私とは違った世界から来た兄弟、私の知らない言語で祈ることを学んだ姉妹、私が想像もしなかったカリスマの表現を見いだした共同体の生を認めることができたとき、新たな形態や表現のあり方を受けることができます。

もう一つの決定的場は、私たちがいままさに経験している劇的歴史との生きた接触です。それには苦痛が伴うことも少なくありません。私は、聖地、ウクライナ、東コンゴ、スーダンや南スーダン、あるいはアフリカのその他の地域、ミャンマー、ハイチ、キューバ、メキシコ、そしてラテンアメリカの他の諸国にいる兄弟姉妹たちのことを考えます。これらは、カリスマが今日、抽象的答えではなく、具体的かつ連帯的活動として成長することを求められている場所です。

✦ 兄弟として、小さき者とともに宣教する観想者たち

私たちの歴史において、改革の動きは常に、観想と宣教から再出発してきました。フランシスコはこの二つを一体だと考えていましたが、私たちは両者を分離させてしまう危険にさらされています。これらは、二律背反の選択ではありません。どちらかを選ぶ必要のある、フランシスカンの生活の二つのモデルでもありません。両者は二つの肺のようなもので、呼吸は一つなのです。説教、活動、奉仕は、フランシスコから荒野を奪いはずでした。フランシスコは、常に長期間の黙想へと立ち返りました。いのちを与える聖霊は、神の御顔と貧しい人たちの顔を見つめるよう招き、それらが不可分であることを明かしてくれる同じ霊です。

私たち兄弟姉妹には、今日でもなお、私たちの住む環境において、新しく活動する国々で建設する建物において、この一致を取り戻す必要があります。また、在世フランシスコ会員も、日常の生活の状況において、こうした一致を見いだしていく必要があります。すべての構造が、この一致を支えるわけではありません。沈黙と奉仕、祈りと寄り添いがともに息づくことができるよう、真摯に共同での識別が必要です。



この使命において、在世会員、姉妹たち、福音的インスピレーションを共有する全ての人々は、私たちの司牧的配慮の対象者ではなく、ともに歩む旅の仲間なのです。フランシスコは、聖職者の組織を創立したのではありません。福音のもとに、あらゆる立場の人々を集めたのです。現代に聖霊が促す新しいフランシスカン生活は、具体的現実との出会いと、何者であるかというアイデンティティ、すなわち、兄弟であり、小さき者であり、宣教における観想者であるということから生まれます。

❖ 貧しい人のための選択：私たちの師

私たちのカリスマの中心には、フランシスコが決してなおざりにしなかった選択があります。「そして、何の取り柄もなく、軽んじられている人々の間で、貧しく、体の不自由な人々、病を患っている人々、レプラを患っている人々の間で、道端で物乞いする人々の間で生活する時、喜ばなければならない」¹² フランシスコは、生涯の終わりに、レプラを患った人々のもとへ戻ることを望みました。¹³ そして、私たちのうちに、貧しい人のように、貧しい人の間で、貧しい人のために生きる種を蒔きました。つまり、私たちは、慈善家ではなく、同じ境遇を分かち合う兄弟なのです。貧しい人たちは、私たちの宣教の「現場」ではありません。むしろ、私たちの師なのです。¹⁴ フランシスコは、レプラ患者との出会いのなかで、このことを理解しました。フランシスコは、その出会いによって喜びを取り戻し、そのまなざしの方向性を永遠に変えられたのです。そして、そこから二度と後戻りすることはありませんでした。

この選択は、いくつかある選択肢の一つでもなければ、ある人はもっているけれども、別の人はもっていない感性でもありません。それは、召命の判断基準で、私たちの家族に属するすべての人に有効です。ここで、とりわけ私の兄弟たちに向けて一言述べたいと思います。小さき兄弟に召されたと自ら認める人は、名誉ある称号ではなく、現実的立場として、小さき者であるということを受け入れます。つまり、上昇を目指すことなく、下にいる人たちと一緒に、下にいるということです。もっと人に認められたいとか、より高い地位を得たいとか、個人や集団としての主役主義といった社会的上昇の願望が、私たちの生活のなかにさまざまなかたちであらわれるとき、私たちがたとえ口ではカリスマを公言していたとしても、事実上、それを否定していることになります。小さき者であることは、召命の基準であり、宣教の基準でもあります。それは、私たちがどこから出発し、誰とともに歩むべきかを示しているのです。

兄弟の率直さで自問してみましょう。私たちと私たちの共同体は、本当に貧しい人たちのそばにいますのでしょうか。それとも、時間が経過するうちに貧しい人たちとの距離が広がり、もはや接触を必要としない組織的事業によって、その距離が覆い隠されていないのでしょうか。周縁に置かれた人々の個人的で日常的生きた出会いは、カリスマを保ち、明確に示し続けるためのもっとも真実な私たちの一つなのです。

¹² 聖フランシスコ『勅書によって裁可されていない会則』9・2

¹³ チェラノのトマス『聖フランシスコの生涯（第一伝記）』103参照

¹⁴ 『総会憲』93・1参照



✦ 福音的自由:仕事、金銭、従属

私たちの生活の一貫性と、その告知に関わるがゆえに、避けて通ることのできない核心的問題があります。それは、金銭との関係です。これは、兄弟たちであれ、姉妹たちであれ、信徒たちであれ、私たちの全員に、それぞれ違ったかたちで関わってくる問題です。フランシスコは、この問題を、自分の福音的体験のもっとも根本的課題の一つと考えていました。それは、被造物を軽蔑していたからではありません。フランシスコは、あらゆる被造物の美しさを歌った人です。しかし、金銭が安心になったとき、ある種の権力と化したとき、何らかの恐れに対する一種の防御となったとき、何が起こるかを理解していました。私たちは、金銭を所有物として捉える一方で、何一つ自分のものとせず生きることを約束したのです。

私たちは、私たちの具体的生活におけるこの核心を真剣に見つめるよう招かれています。私たちと金銭との関係はどのようなものであり、個人として、また共同体として、どのように金銭を管理しているのでしょうか。資産的余裕は、たとえそれが善い事業のために使われる場合でも、私たちと貧しい人たちとの間に、また、資産が多い共同体と少ない共同体との間に、少しずつ目に見えない壁を築いてしまうかもしれません。これこそ、フランシスコが様式として選んだ福音への従属から私たちを遠ざけてしまう、ある種の安心です。これは未解決の課題であり、私たちは共同体のなかで、この問題を深く問わなければなりません。

フランシスコは、生活の維持の基本的かたちとして、これらすべてを自らの手で働く仕事の優先と結びつけています。仕事は、必要性に迫られた妥協ではありません。それは、自分たちを被造物としての現実のなかで維持していく選択であり、私たちを既得の地位ではなく、共同体の生活に従属させ、支配者ではなく、貧しい者としめます。その反対の危険、すなわち生計の維持のために受動的権利を得て、対価としての労働を一切提供することなく受け取るものだけで生きるとは、私たちがカリスマから遠ざかっているしるしです。それではもはや、聖霊の賜物としてのカリスマを受けられなくなる危険があります。信徒たちは、私たちがこの側面を発見し、よりふさわしく生きる助けを提供してくれるかもしれません。

最後に、とくに心に響くフランシスコの言葉があります。私たちのもつすべては賜物であり、私たちには属さず、私たちはただ受けるばかりだということです。私たちの存在、管理する財産、住む建物、利用する資産はすべて、私たちに貸し与えられた賜物です。私たちは、それらを自分たちのために留めておくことはできず、返すよう求められています。そしてその真の受け手は、貧しい人たちです。「施しは、貧しい者たちに授けられるべき遺産ならびに当然の権利であって、それを私たちの主イエス・キリストが私たちのために獲得してくださったのである」¹⁵ 私たちが受けただけのものを貧しい人たちに返すことこそが、私たちの召命のもっとも雄弁な行為です。その行為は、フランシスコが示してくれたように、私たちが恐れを抱かず、父を信頼していることを意味します。

¹⁵ 聖フランシスコ『勅書によって裁可されていない会則』9・8



✦ 総集会に向けて

800周年を終えた後も歩み続けるというのは、単に新たな記念碑をいくつか発見し、この章もアーカイブに収めることではありません。それは、聖霊がフランシスコを通して解き放ったこのいのちの賜物に倦むことなく応え続け、今日それが具体的かたちを帯びるよう、それに触れ、時には煩わせもすることを意味します。

このいのちは、私たちが受けたカリスマと、それを何世紀にもわたって具体化してきた様式、伝統、構造とを過度に同一視することから、私たちを解放してくれます。フランシスコは、聖霊のうちに、福音の自由を生きました。その息吹を遠ざけようとしてはなりません。私たちの選択、私たちの告知、そして私たちの兄弟性の真の様式のうちに表現されるよう、その息吹を具体的にしていきましょう。

皆で一致して、2027年にヴェトナムで開催される総集会の準備を始めていきましょう。それは、兄弟たちの日常の生活からは遠い出来事のように思えるかもしれませんが、しかし、この歴史的瞬間において、私たちが国際的共同体としての意識を高め、行動していくことはきわめて重要です。総集会の準備には、多くの兄弟たち、地域共同体、管区や分管区、諸管区協議会が関わっていくことになります。また、各諸管区協議会から2名の信徒をヴェトナムに招き、一週間をともに過ごし、その声と未来へのまなざしに耳を傾ける予定となっています。ですから、たとえしばしば、灰の下でかすかに燃える残り火のようなものとなったとしても、私たちの間に存在するこのいのちに声を与える歩みとなりますように。この火を再び起こし、燃え盛らせる機会となりますように。このいのちは、私たちに強く働きかけ、すべてがすでに閉じられているかのように見える場所で扉を開き、困難のなかにも希望を育む必要があることをかっつけてないほど私たちに教えてくれているこの苦難の時代には、神がすでに織りなしておられる未来へと私たちを導いてくれます。

✦ 世界が待っている

これは、私たちだけに当てはまることではありません。教会がその召命と使命を完全に生きるためには、このような聖霊の表現が必要です。そして世界は、時にはいかなる宗教にも帰属意識をもたない多くの人々を通してさえも、私たちがもっているこのいのちを解き放つよう求めています。それは、あらゆる被造物のうちに宿り、被造物を神ご自身のいのちにおける成就へと導く、あの鼓動を感じることでできる場所が生まれるようにするためです。



ともに祈りましょう：

聖霊よ、この小さな民のもとに、小さき兄弟姉妹たちのもとに来てください。
あなたの愛の炎で、私たちのうちに、正しい信仰、確かな希望、そして完全な愛を再び灯してください。私たちが受けた賜物を自分たちだけのために留めておかず、ささげられたいのちとするように、私たちの意志と心を変えてください。聖母マリア、教会となられたおとめよ、私たちのこの歩みに同伴してください。聖フランシスコ、別の代の人よ、福音こそが、いまなお私たちの唯一の豊かさであることを、私たちに思い出させてください。アーメン。

兄弟姉妹の皆さん、輝かしい聖霊降臨祭をお迎えください。本会の真の総長である聖霊が、すべての被造物の心のもっとも深い願いである、その完全ないのちへと私たちをともに導いてくださいますように。

皆さんの兄弟にして、しもべ、



Fr. Massimo Fusarelli, OFM

Fr. Massimo Fusarelli, OFM
Ministro generale

2026年5月13日、ローマ、修道会総本部にて

Prot. 115201/MG-048-2026



ORDO FRATRUM
MINORUM

Curia Generalis
Via di S. Maria Mediatrice, 25
00165 Roma, Italia
www.ofm.org